

令和 5 年度大（応）神塚古墳（寒川町No.8 遺跡）保存目的のための調査概要

遺跡の名称	大（応）神塚（寒川町 No. 8 遺跡）
調査実施日	令和 6 年 3 月 4 日（月）～3 月 28 日（木）（内 15 日）
所在地	高座郡寒川町岡田 2377
調査機関	寒川町教育委員会 教育政策課
調査担当	小林秀満
調査面積	8.2 m ² （トレンチ 1 カ所）
調査原因	保存目的
発見遺構	近代：不明遺構（段切り状遺構？）
出土遺物	土師器、陶磁器、かわら

調査成果

大（応）神塚古墳は、寒川町指定重要文化財第 19 号であり、町内唯一の墳丘を保った古墳である。明治 41 年（1908）、東京帝国大学の坪井正五郎氏を中心とした発掘調査が実施された他は、昭和 57 年に神奈川県教育委員会において測量調査を実施したのみである。これらの調査から、前方後円墳であり、5 世紀ごろの築造とされている。

しかし、明治時代の調査であり、遺物の出土状況、古墳の範囲や周溝の有無、築造の年代や方法など不明な点が多いのが現状である。

今回、古墳の形態や、範囲、築造年代などの古墳の性格を把握し、今後の保存方法検討のための基礎資料とするための調査を実施した。

本年度は、古墳前方部西端の確認を目的として実施した。

調査地点は安楽寺南側墓地の西側個人住宅の庭内で実施。現状は家庭菜園であった。

当初 1.5m×4m でトレンチを設定したが、東側へ 1m 延長し、さらに東側へ 0.5m×0.7m 拡張し、最終的には約 8.2 m² となった。

調査地点は東側墓地より 45 cm ほど低くなっており、標高 16.1m ほどであった。

表土層下も灰褐色土で締まりの弱い現代層が続き地表下 80 cm ほどで、若干締まりのある灰褐色土層となるが締まりは全体的に弱く、この層から陶磁器、かわらが出土した。地表した 120cm ほどからローム混じりの暗褐色土となり、地表下 140cm ほどからロームブロックを多量に含む黒褐色土層となった。この面の上面は若干硬化面がみられた。地表下 170cm ほどでローム層の底面となった。

西側は地表下 150 cm ほどで底面となり、東側は一段低くなっている。東側の境界に近いところで遺構の立ち上がりがみられた。

宝永スコリアらしき層が見られず、遺物も近代と思われるものが確認されたのでおそらく近代の溝や段切り状遺構なのではないかと思われた。また各層締まりがなく、平坦に堆積していることから、耕作を続けてきた様相が伺えた。

遺物は土師器片、陶磁器、かわらなどが確認された。近代、現代の層ながら土師器片が確認され

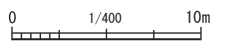
ており、東側の古墳からの流れ込み土等を攪拌したものと想われた。

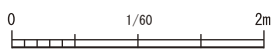
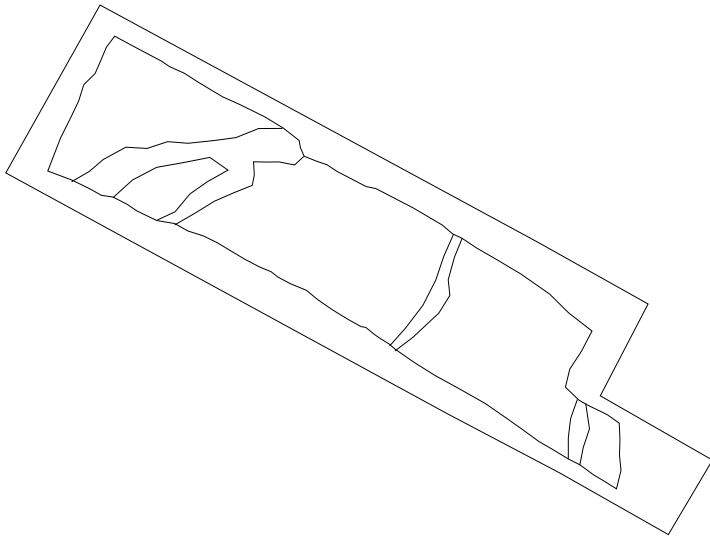
所見

今回の目的である古墳前方部西端を確認することはできなかった。

今回の調査、及び本遺跡西側に隣接する宮山根岸遺跡の調査から、安楽寺及び墓地より西側の民地部分については近代以降にかなり地形に改良が加えられた様相がみられる。宮山根岸遺跡からは中近世の段切り状遺構が確認されており、その段階から土地の改変の状況が見られた。台地南西端であり斜面地等を切り出し平地面を作成していた様相が感じられた。よって古墳関連の遺構が存在していたとしても残存している可能性は低い状況であると思われた。

今回の調査では土地利用の変遷は確認できたものの、主目的である古墳南西部分についての状況は不明のままとなってしまった。今後、今回の調査区周辺の建物が解体予定ということであり、解体時には遺跡の状況を確認したいと思う。







調査前（西から）



調査後（西から）